



## 四 遭遇四

---

「次は、B O 駅、次はB O 駅」

ようやく、俺の降りる駅に着いた。今度は、一体、誰が乗ってくるのだろうか。さっきから、赤ちゃんに白、サラリーマンにしろ、老人にしろ、男ばかりだったから、どうせなら女性に会いたいなあ。

それなら女子高生か。いや、最近の女子高生なら、おっさんの俺なんて集団で取り囲まれていじめられそうだ。それじゃあOLは。最近はセクハラの基準が厳しいから、電車の中で見ているだけでも訴えられるかもしれないぞ。それなら若妻ではどうか。それも一緒か。こんな遅い時間だから、女性だったら熟女に決まっているだろう。ひよっとすると、さっきの流れからすれば老婆かもしれない。まあ、誰でもいい、どうせ自分はこの車両から降りるのだから。

車両はゆっくりとホームに滑り込んだ。

俺はドアの前に立つ。俺が降りる駅には誰も待っていなかった。最終便だからな。この駅から乗る人なんていないよな。当り前だが、少し残念な気持ちだ。さあ、早く、帰って寝よう。明日も早いぞ。俺は気持ちを切り替えた。

プラットホームから見える乗り口の階段は薄っすらと明るくなっていた。夜が明けかかっているのだ

俺は、何時間、電車に乗っていたのだろうか。そんなに時間が立っていないはずだけど。

まあ、いいか。

駅の改札口に足早に進む。乗客は誰もいない。あくびをして暇そうにしている駅員が一人いるだけだ。俺は財布を取り出して、改札機にタッチする。

視線を感じて顔を向ける。駅員がにこっと笑みを浮かべ、「お疲れさまでした。これから頑張ってください」と頭を下げた。

今から寝に帰るのに、何を頑張るんだと思いながらも、駅員のがくびが伝染したのか、俺もふわあとかくびをしながら両手を広げ、背筋を伸ばした。

「おかあさん。産まれましたよ。元気な男の子ですよ」

助産師が、今、生まれたばかりの赤ちゃんの姿を母親に見せる。

母親は赤ちゃんが両手両足を伸ばしている様子を確認した。

「これから、あなたの人生が始まるのよ。頑張ってね」

赤ちゃんは母親の言葉に答えたのか、それとも答えなかったのか、ふわあとあくびをした。